Report Tenjou-kai 天上会取材記

陶芸クラブ

毎月第3木・金曜日に行われている陶芸クラブ。
新樹学園・カイロスを利用する方が、自身の感性やアイデアを
カタチにする創作活動の場として、外部講師を招き活動されています。

個性をカタチにする、自由で創造力あふれる創作活動。

猛暑も若干のやわらぎを向かえた9月半ば。取材に訪れたこの日は、成形や絵付けの作業が行われいた。

陶芸クラブで製作される作品は、既製品の製造工程とは異なり、形・色・絵柄など事前には何も決められていない。自由で即興的な作業により、それぞれの個性を存分に引出しながら創作活動を楽しめる環境となっている。

製造工程や材料などは外部講師や支援員が管理するが、主体は利用者の皆さんにある。集中して作業をする方もいれば会話を楽しみながらする方もいる、とても和やかな教室。「決して作品づくりが目的では無い。1人1人の個性をサポートし、自由で充実した時間を過ごしていただける環境を提供する事が私たちの使命である。」支援員の方が話された言葉のように、ここから生まれた作品はどれも自由で個性豊かな魅力に溢れ、活動する皆さんの穏やかで優しい表情が、自己表現に対する喜びと充実感を物語る。

写真撮影にも気軽に応じてくれた皆さんの曇りのない満面の笑みが、強く印象に残る取材であった。

（取材：PRAIN DESIGN OFFICE）

編集後記

秋の夜長、虫の音が心地よい季節となりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか？

今回、初めて編集委員として「ひろば」の作成に関わらせて頂きました。今号の特集として「天上会の地域活動」を取り上げました。作成を進めていく中で、当法人の事業が地域との関わりが密接であり、欠かせないのもだと実感しました。様々なイベントを通じて、地域の方々と共に利用者さんの笑顔が溢れる様子を目にして、心温まるなぁと感じます。

作成に携わる広報委員は、各事業所から任命されて作成にあたります。広報委員と意見交換を行なっていく中で、各事業所が行っている活動が地域に根差し、利用者さんの生活の一部になっています。これからも、地域密着を更に定着化していき今後の事業を展開していくことで、利用者さんの笑顔が広がっていければと思っています。

次号はまた違った角度からの特集を組みたいと思っておりますので、御期待下さい。

編集委員
前田智史・倉園真由美・猿渡賢・中島香織・飯森美沙子・井ノ上仁・前原まなみ・山元りょう子・木村恵智子・西濵理江・藤村弘美・枝元翔平・井上晃

社会福祉法人天上会広報誌「ひろば」2015年秋号 発行日：2015年11月20日 / 発行：社会福祉法人 天上会　理事長　野村 碩夫 / 表紙写真：めぶき園（第49回文化祭）

社会福祉法人天上会広報誌「ひろば」2015年秋号 発行日：2015年11月20日 / 発行：社会福祉法人 天上会　理事長　野村 碩夫 / 表紙写真：めぶき園（第49回文化祭）

ひろば

社会福祉法人天上会　広報誌
2015年 秋号

特集1：活動 ／ イベントリポート ＞ P3・4

天上会の地域活動

つながる、ひろがる、福祉のネットワーク

特集2：故 三反田 悦郎さん 追悼 ＞ P7・8・9

悦郎を偲んで

ご家族からのメッセージ

理事長挨拶「異常気象と利用者の健康について」＞ P1
平成27年度新任職員紹介 ＞ P2
事業所活動報告（カイロス・めぶき園・こだま）＞ P5・6
保護者様の声 ／ 平成26年度苦情・相談受付内容の一部 ／ 御礼 ＞ P10
陶芸クラブ活動・作品紹介 ／ 編集後記 ＞ P11

理事長挨拶

異常気象と利用者の健康について

社会福祉法人 天上会　理事長　野村 碩夫

今後の環境変化と障がいをもつ人たちの日常生活

今年になって、それこそ異常な大雨が降り続き、時には時間雨量が100ミリを超える時があり、天気予報を見ながら、こんな大雨が車のフロントガラスを叩くと、いくらワイパーを早くしても前が見えなくなるのではと思った。そして、この大雨が1ケ月近くも続くと水が土の中に浸み込み、大変な量の水が火山土壁の中から、田んぼの溝に長時間、流れ出てくる。

そしてある日を境に、突然、雨が降らなくなり、毎日毎日、真夏の直射日光が降り注ぎ、真夏日が続いている。

そして、新聞もテレビも「全国の最高温度と熱中症の話題」と、その熱中症を防止するための話題に集中している。この極端な気候の変動は地球温暖化の一つの要因として、今や地球全体の存在に関わる命題に係わらず、どうも今日の世界の動向は目先の経済の動きや、権益争いに終始し、生命の存在する環境そのものが世界の潮流として本当に軽く見られる傾向が強くなってきているのではないかと思う。そしてこれらの環境の変化が障害をもっている人にとって、日常生活を送るのに大変な生活の困難さを与えているのではないかと思われるような状況が朝晩目につく事がある。

夜、眠れずに早い時間から起きている人、今まで静かにみんなと一緒に生活されていた人が突然大声を出し、発作性の症状を呈する人の、その突然の変化に思い当たる、周囲の環境の変化が見当たらない中での、一時の突然の変質に戸惑う支援員の皆さんの状況が目につくようになってきた。何故、私たち、同じ人間として全く感じない環境の変化が利用者の皆さんの突然の変化に結びついているという、私の考え自体が私の独断かもしれないが、看護師や支援員、理学療法士等の話し合いでも、一日のなかでも様々に変わる利用者の状態にどう対応すべきなのか、なかなか納得いく答えは出てこない。

そして、その日の天気の状況や温度などを見ながら、散歩の時間帯、散歩の在り方、あるいは運動の場所（室内）等の色々の工夫を重ねているが答えは出てこない。

私自身、皆さんの試行の状況を見ているなかでも、どうも極端な異常気象が利用者の内面に何らかの影響を与えているのではないかと思う時がある。

環境変化に対応した法人運営と利用者支援

私たちは今、入所施設の居室の在り方を考える中でプライバシーの保護と、夜の個室の気密性の確保が最大のテーマではないかと思ったりしている。

気候の変動で、低気圧が近づいてくると頭が重くなるという人や、頭が痛いという人もいると聞くが、精神的に繊細な方々にとっては本当に難しい問題ではないだろうかと思う。又、営農事業の作業を中心とした利用者の方々で、戸外の仕事を中心に取り組み、就労への道を望む方々は真夏の灼熱の太陽を浴びて頑張っておられるが、水分補給、休憩時間の配分、そして首までも直射日光から守る帽子等、色々配慮しているが、この夏場の戸外での作業を早朝からの作業とし、昼からを室内と分離しながら仕事の配分ができたら非常に効率的な作業と利用者の作業環境の改善に資すると思う。それには、事業内容の見直しが大きな課題になるかもしれない。ぜひ、時間をかけて検討して行きたいと思う。

ホームページ リニューアルのお知らせ

社会福祉法人として説明責任がある組織や財務等の情報を公開しています。平成25年5月31日付けで、厚生労働省から「社会福祉法人の運営に関する情報開示について」（厚生労働省雇用均等･児童家庭局長、社会･援護局長、老健局長連名通知）が発出され、所轄庁に対し、所管する社会福祉法人の財務諸表をHP等において公開するよう要請されたことに伴い、社会福祉法人天上会の財務諸表（貸借対照表及び収支計算書）等を公表します。

http://www.tenjou-kai.com/

平成27年度 新任職員紹介

4月より10名の方が当法人に入職しました。
法人理念である「共に生きる」を心に、
利用者支援を行っていきます。
ここで、個性溢れる顔ぶれをご紹介いたします。

質問事項：1.アピールポイント / 2.仕事に欠かせないもの / 3.リフレッシュ方法 / 4.好きな言葉

上薗 輝典　新樹学園

1. 誰とでも気軽に話をすること
2. やるべき事を手を抜かず丁寧にすること
3. 田舎の砂浜を歩きながらめずらしい貝殻を拾う事
4. 世の中の人は何とも言わば言え、我がなす道は我のみぞ知る

前田 里菜　新樹学園

1. 若さと眼鏡です。
2. ボールペン
3. 好きな時間まで寝続ける
4. のんびり

造倉 直樹　新樹学園

1. 1人1人と向き合い、声に耳を傾けます。
2. 明るい心
3. とにかく笑う
4. 素直

山脇 麻里子　新樹学園

1. 健康
2. 誠実である事
3. 美味しい物を食べる・断捨離
4. 日日是好日

宮下 浩美　新樹学園

1. 体力
2. 思いやり
3. ドライブ･ジョギング
4. 一期一会

中和田 明美　新樹学園

1. のんびり屋でマイペース
2. 思いやり
3. 遠くへドライブ
4. 笑顔と感謝

田浦 静香　カイロス

1. 何事にもきちんと向き合います。
2. 水分補給・ポジティブシンキング
3. 弓道・音楽を聴く・歌う
4. 仁義礼智信

大久保 愛子　カイロス

1. のんびり屋です。マイペース過ぎると言われます。
2. 笑顔
3. 散歩・ドライブ
4. 毎日毎日の足跡が自らから人生の答えを出す。きれいな足跡にはきれいな水がたまる。

中村 修一朗　はなのこ園

1. 元気
2. よく考えて行動する
3. 旅行に行く事・とにかく良く遊ぶ
4. やれなかった やらなかった どっちかな

遠矢 絵理香　るうと

1. 活発
2. 笑顔・心・信頼
3. 衝動買い・遠くへドライブ
4. 感謝

活動／イベントリポート 「地域社会とともに歩む」

天上会の地域活動

「つながる・ひろがる」福祉のネットワーク

私たちは施設行事や多くの地域イベントなど、
さまざまな機会を通じて地域で暮らす皆さまとの交流を深めています。

春の夜間総合防災訓練

3/7(土) 障害者支援施設 新樹学園

安全で安心な生活のために。

新樹学園入所部 支援員 松長 敏成

平成27年3月7日、春の夜間総合防災訓練を行いました。この訓練は、入所で生活されている利用者を始め、天上会職員、近隣の方々の他に、東部消防署・後田分団や肝付警察署、肝付町役場の協力を頂きながら、毎年行っています。この訓練を通して感じる事は、まず地域との繋がりです。今年は15名と多数のご参加を頂きました。本当にありがたい事だと思います。新樹学園がこの地域に移転し27年。参加下さる方々は、訓練の度に利用者と触れ合って下さり、「寒くない?」「気を付けて!」と、笑顔で優しく声を掛けて下さいます。他にも、普段歩行に出た時などにも、顔を見れば「おはよう!」「今日も頑張って!」と声を掛けて下さいます。この地に根差し育まれてきた周辺との繋がりが、災害等に直面した際に活かされるのではないでしょうか。この時期、テレビでは火災のニュースが後を断ちません。「明日は我が身」と思いながら、利用者の安全を守り、安心して生活して頂けるよう、日々努めていきたいと思います。

とっておきの音楽祭 in 鹿屋

5/3(日) 中央地区商店街特設会場

私たちらしさの音楽祭

新樹学園入所部 支援員 松元 あゆみ

毎年5月の連休中に開催される「とっておきの音楽祭♪」。今年も、天上会の利用者・職員と総勢50名ほどで参加してまいりました。

4月ごろから「今年も音楽祭は出るのかな?」「何を歌うかな?踊るかな?」の話題で盛り上がります。職員・利用者そろってひとつのテーマに基づき作り上げる音楽祭のステージ。今年は、「故郷を大切に、思いを込めて・・・」をテーマに「ふるさと」と言う歌に簡単な手話を添えて出演しよう!と練習が始まりました。

練習開始直後は、なかなか歌と手話を重ねて動くことが出来ず、全員が合わせて苦笑い。それでも毎回練習を重ねてきました。また、カイロスでも「今日は練習だね!暑いけど頑張ろうね」とお互いを励ましあう声を聞くこともありました。

当日を迎え「自分らしく!素直なままで!」と皆で声を掛け合い、ステージに向かいました。職員の緊張をよそに、ステージに立った利用者の笑顔はいつもと変わらず、自然とあふれだす動きにたくさんの拍手を頂き、楽しかったステージもあっという間に終わりを迎えました。毎年参加する度に得る印象的な思い出を心に刻み、来年にも繋げて行きたいと思います。

天上会 夏祭り

7/18(土) 天上会グラウンド ふれあい広場

「夏華～歌って踊って笑顔の輪」

新樹学園入所部 支援員 野間口 英一郎

平成27年7月18日(土)に天上会夏祭りが開催されました。当日は保護者、利用者、ボランティア、地域の方等を含めて約400名の方が参加して下さいました。ゲストでは、寿敬心保育園様、志布志千軒太鼓様、肝付副町長様が所属のバンド「RORO」様に参加して頂き、地域との交流を深め、盛大な夏祭りを行う事が出来ました。途中雨が降ってくる事もありましたが、皆様のご協力のもと、無事終える事が出来ました。今回の夏祭りのテーマ「夏華～歌って踊って笑顔の輪」のように、皆さん歌って、踊って、楽しまれていた様子で沢山の笑顔を見る事が出来ました。

めぶき園 公開療育

8/20(木) こども発達支援センター めぶき園

こどもたちの生き生きとした表情に溢れる

めぶき園 園長 大村 恵子

鹿屋市・南大隅町・錦江町の3教育委員会と9つの小学校、養護学校の18人の先生をお迎えして、来年度就学予定児19名(めぶき園17名、はなのこ園2名)の公開療育を実施しました。見知らぬ沢山のおとなたちに囲まれながらも、こども達はのびのびと素の姿を見せてくれました。

アンケートには「こどもさんたちの生き生きした表情が良かったです。学校でもこの笑顔曇らせてしまわないようにしていきたいです。」「かねてと違う雰囲気の中でも、一人ひとりが楽しく活動している様子に感動しました。」「朝の会、MC、帰りの会の中で先生方がこども達一人ひとりと視線をしっかり合わせて活動を進められていることに、あらためて自分自身を振りかえることでした。」など嬉しい感想が書かれてありました。

あたたかな感想の数々にこどもの成長を感じ、ほっとしました。

グループホーム「わかくさ」奉仕作業について

9/13(日) 肝付町白坂地区

奉仕作業を通じて地元の皆様とふれあう

照葉の森 施設長 前田 智史

平成27年9月13日、グループホーム「わかくさ」がある白坂地区の奉仕作業が行われ、午前6時30分から7時30分までの約1時間、ホーム女性利用者8名のうち6名(2名は足が不自由なため不参加)、世話人1名で、ホーム周辺の清掃作業を行いました。

「わかくさ」の奉仕作業への参加は、「わかくさ」の前身である男性グループホーム「あおば」が平成5年にこの地にお世話になって以来、毎月欠かさず参加させていただいております。奉仕作業の参加を通して地元の皆様と顔なじみのお付き合いをさせていただいていると利用者・職員一同実感しております。

今年7月に初めて実施した消防署立ち合いの下での「わかくさ」の火災避難訓練では、地元の方々の多数のご協力をいただき、これも普段の奉仕作業のおかげだと思っております。

残念ながらこの日は、地元の運動会と重なり、地元の皆様の参加はありませんでしたが時折通り過ぎるご近所の方々と元気よくあいさつをかわす利用者の様子を見てこの地で生活させていただいていることをありがたく感じた時間でした。

カイロスの商品

地域愛

カイロス 就労支援員 前原 まなみ

障害福祉サービス事業所カイロスでは各作業班ごとに様々な活動を行っています。

パン工房こかげでは地域の方との交流の一環として、利用者の方も毎日の販売に同行してパンの販売をしております。販売先ではパンの販売に来るのを毎回楽しみにされているお客様もいらっしゃいます。また、店頭販売以外にも地域のお店や温泉施設などにもパンを納品しております。

みのり工房では味噌をはじめとする加工食品を販売・納品しております。これからも地元でとれた食材を使った商品作りに取り組んでいきたいと思います。

結工房ではクラフトかごやクラフトを使用したランドセル、手作り石けんに加え、新たにPPバンドを使用したかご作りに取り組んでいます。パン工房での販売のほか注文も受け付けております。

グリーンファームでは大隅広域公園への定期的な苗の植え込みや地域の無人販売所での野菜や花の苗の販売などを行っています。また農協や市場への出荷等もしております。

鹿屋・大隅地区障害者就職面接会

9/17(木) 鹿屋商工会議所

就職に向けて精一杯自己アピール

おおすみ障害者就業・生活支援センター 就業支援相談員 木村 恵智子

毎年恒例のハローワーク主催の鹿屋・大隅地区障害者就職面接会が9月17日鹿屋商工会議所で今年も開催されました。(写真上)センターの登録者も大勢参加されて緊張しながらも精一杯自己アピールしておられました。一人でも多くの方が就職につながりますように応援しています。

この就職面接会を前にセンターでも毎年「直前セミナー」を開催しています。(写真下)今年はA-cube株式会社の立元昭子氏をお招きして面接のための「身だしなみ」「姿勢」「表情」の大切さや質問に対して良い印象を与える答え方などを丁寧に教えて頂きました。

事｜業｜所｜活｜動｜紹｜介

私たちが運営する6つの事業所での活動や取り組みをご紹介します。
障害福祉サービスの分野において、それぞれが特化した専門性を持ちながら支援を行っています。
今回は、「障害福祉サービス事業所カイロス」・「こども発達支援センターめぶき園」
「生活支援センターこだま」の3事業所です。

障害福祉サービス事業所 カイロス

ありのまま

施設長 松元 輝徳

やぶさめ祭りにて

秋風が冷たく感じるようになってきた今日この頃、今年は例年にない長雨が続き梅雨明けしたら猛暑と、自然の厳しさを身を以て感じた夏だったように思います。カイロス利用者の皆さんも各自分の持ち場で作業、訓練等に一生懸命取り組んでいただいています。自分の得意な作業、不得意な作業と色々ありますが、それはみんなあることで、得意な所は磨きをかけ、不得意な所は少しずつ変えていければと思います。

さて27年度も半分過ぎようとしていますが今年は、新卒利用者の方1名を受け入れ、自立訓練5名、就労移行支援5名、就労継続支援 B 型55名、合計65名でスタート致しました。各事業としての目標はもちろんの事、個々の支援計画に掲げた活動をしております。昨年5名の方々を就職させることが出来、ほぼ定着しつつあり、まずは一安心しております。今年も1・2名の就職目標を掲げ取り組んでいるところです。　就職に至るまでには、生活環境、交通手段、金銭管理と色々な課題があり、それがうまくかみあって就職となります。その中でも私たちの住んでる地域は、交通手段が一番のネックでこれが解消できればまだまだ視野も広がるのですが、なかなか厳しいのが現状です。地域的に難しい方々は、グループホームを利用しながら就職を今後も考えていかなければいけないかと思います。就労継続支援B型は、パン工房、みのり工房、グリーンファーム、結工房と4ケ所で活動をしております。パン工房は一昨年まで2ケ所で活動しておりましたが、昨年3月に鹿屋店を閉鎖、 4月より肝付店を増築し1ケ所で活動しております。パン工房、みのり工房と地域に根差す活動を今後も目指して行きたいと思います。グリーンファームは、生産牛、野菜の契約栽培、野菜、花の苗物販売、枝物（しきみ）の栽培を行っております。しきみの販路が年々拡大しつつあり、お盆、お正月、彼岸の頃は、多くの出荷をしております。出荷にあたっては、長さ、重さ、見た目が重要で一束括るのもなかなか難しいのですが、現在6・7名の方々に枝わけから括りまでしてもらっています。結工房は、内職作業、クラフト作業を中心に活動し、注文に応じた籠等も作成しております。　私たちは、利用者個々の持っているありのままの姿を受け止め、その人がその人らしく生きていく上で、持ってる力を最大に生かせるような支援を今後も続けて行きたいと思います。

パン工房こかげ

グリーンファーム

みのり工房

こども発達支援センター めぶき園

めるはなin文化祭

園長 大村 恵子

夏休み最後の土曜日、鹿児島県施設文化祭にめぶき・るうと・はなのこの子ども達と、その兄弟姉妹達で参加してきました。

２５分間のプログラムは、めぶき・はなのこ園の小さい人をセンターに置いた「妖怪体操」で幕を開けました。幕前は緊張のあまり、ひきつった表情で立ちつくしていた子ども達ですが、幕があがり温かい拍手で迎えられると…一気にテンションUP。満面の笑みで張り切って体操するのでした。

演目は特別に用意したのではなくこどもたちの「得意なところ」「好きなもの」をクローズアップしたものです。
昆虫の好きな人、折り紙の上手な人は「昆虫博士」「折り紙博士」で登場し、ミスターチルドレンにどっぷりとはまっている人は友だちの協力を得て「ミスチルエアバンド」のボーカルとして熱唱しました。ダンスが好きな人は、「Joy!!」で輝き、バチの得意な人は「クシコスポスト」で会場と共に盛り上がりました。自作の歌とピアノで観客を魅了した人もいます。

司会進行は八名の子どもが担当しました。司会は「お話しする」ことが得意な人が選ばれたのかというとそうでもありません。
「声を聞いたことが無い」と言われる人や「緊張しぃ」の人も担当になりました。偉いなぁとおもうのは苦手な人が（いやだ）とか（なんで、わたしが）と怒ったり泣いたりしなかったこと。断らなかったことです。

卒倒するんじゃないか、くらいのプレッシャーを背負いながら、みんなと自分自身の期待によく応えました。素晴らしかったです。

この文化祭で子どもの園が参加するのは珍しく、云わば異色の存在だったようですが、初めての大舞台に、こどもたちは心地よい緊張感と清々しい達成感と、「友情の芽」のようなものを獲得したように思います。素晴らしい経験をさせて頂きました。

文化祭を企画運営して下さった方々、保護者、観客の皆様、楽しんでくれた子ども&兄弟姉妹達、一生懸命工夫を重ねてくれた職員達に深く感謝いたします。

生活支援センター こだま

安心のためのネットワークづくり

センター長 江之口 博行

生活支援センターこだまが「肝属地区障がい者基幹相談支援センター」の知的障がい・障がい児対象の相談窓口として鹿屋市社会福祉会館で仕事をはじめてから早いものでもうすぐ 10 年になろうとしています。

平成 20 年度には「おおすみ障害者就業・生活支援センター」もスタートして対象者は地域で生活する障がいのある、赤ちゃんから高齢者まで、子育てや介護の相談から仕事の相談と幅広く多くの方と関わってきました。悩みも喜びも共有して、時には解決できない大きな問題に、ただ聞くことしかできずに申し訳ない思いに落ち込んでしまう事や就職できたうれしい報告を頂いたときに自分のことのようにスタッフみんなで幸せを感じたり・・。相談支援の仕事は一喜一憂の毎日です。

相談の内容によっては、センターだけで解決しようとせずに、福祉事業所や病院、就職先などその方に関わる人や機関と会議をして方法を考える場合も多くあります。

そのためには私たちは、自分だけがなんでもできる、何でもわかるスーパーマンではなく、地域に「どんな人々が・どんな場所が・どんな機関」があり、どのような方法が必要なのかを考え、多くのつながりを持つこと、ネットワークをつくる力が必要だと考えています。

事務局として関わっているおおすみ療育ネットワークの「だれもが住み慣れた地域で安心して生活する」というテーマはまさに私たちスタッフの目標でもあります。この地域で育つ障がいのあるこども達がのびのびと成長し、そのご両親、きょうだいさん達までみんなが笑顔で暮らせるように、なにか困ったときに「こだま」に行こう！「こだま」に電話してみよう！とすぐに思いついて頂けるような、いつもそんな存在でありたいと願っています。

障がい者に関わる法律、制度は日々めまぐるしく変化しています。私たちスタッフも常にその変化に対応できるように学んでいかなければなりません。これからも、一人ひとりに寄り添える、そんな関わりのなかから生まれる相談支援を心がけていけたらいいなと考えています。

療育等支援事業

連絡会議

ハートフルウィーク

故 三反田 悦郎さん 追悼

悦郎を偲んで

文 / 上温湯（うわぬるゆ） 忠義さん

約27年間、新樹学園で生活を共にした三反田悦郎さんが、
闘病の末、平成27年5月11日午前10時40分、享年60歳で逝去されました。
生前大変お世話になりました皆さまへ向け、ご家族からのメッセージをご紹介するとともに
悦郎さんのご冥福をお祈りいたします。

刻々と迫りくる運命のその日の朝、どんよりと雲った蒸し暑い朝。昨夜来より夜を徹し運命の決断を、家族会議(私たち夫婦、妹夫婦)で下した私たちの胸の内を、見透かしたような朝であった。

平成27年4月19日（日）、学園より連絡をいただき、「悦郎君に微熱があるので、近隣のかかりつけの病院で受診致します」との連絡があった。その折、「受診の結果不都合があれば、明日大隅鹿屋病院で受診することになります。また、大隅鹿屋病院での受診になれば、即入院になる可能性があります」との話であった。私たち夫婦も風邪でも引いたのだろうぐらいで、その時はそんなに深刻には思わなかったが、翌日（20日）、大隅鹿屋病院へ入院の連絡をいただき夫婦で駆け付けた。まだその時までは深刻に受け止めず、2･3日もすれば退院になるぐらいの軽い気持ちで病院を去った。しかし23日（水）、私が昼食を済ませ他の事業所へ向かう12時30分ごろ、携帯電話への受信があり電話を取ると、「大隅鹿屋病院です。看護師の方から悦郎さんが急に心肺停止の状態で一刻を争います、すぐ家族の方は病院へ駆けつけてください」との連絡であった。

私自身も一瞬何事がおこったのか訳が分からず、なぜか涙が溢れるばかりであった。すぐ気を取り直し、妻へ連絡を取った。妻も気が動転し、昨日までは何の兆候もなく入院生活を送っていたのに「何でそんな急に?」、妻も取るものもとりあえず病院へ駆けつけたが、声を掛ける間もなく集中治療室（ICU）へ。待合室へ出向くと、既に学園の方から倉施設長をはじめ3名の職員も駆けつけてくださっていた。

大隅鹿屋病院の待合室で約1時間弱待っていると、医師が現れ血圧が上がらず非常に危険な状態であり、後1時間持つかどうかとの話であった。私どもも気が動転していたが、職員の方々から涙が溢れていたのが印象的で、今思うと新樹学園でお世話になったのが悦郎にとって人生で最高の幸福であったのではと思えてならない。危機的状況の連絡をいただいてから妹夫婦へ連絡をとったが、遠方な為時間を要する事になった。悦郎は3人姉弟の直ぐ上の姉のかつ子を、日頃からかっちゃん、かっちゃんと呼び親しみを覚えており、何とか義妹に息のあるうちに一目逢わせられればと、医師へ懇願した。医師の方から、血圧を上げる強い薬を打つことに同意を求められる中、やっとICU室への入室を許可され、学園の3名の職員と共に入室したところ鼻･口･手･足の至る所に薬の管が無数に繋がれていた。わずかな面会後、待合室へ医師が頻繁に訪れ、「もう1時間、30分、限界だ、妹さん到着はまだか、まだか。」の催促で私もイライラがつのり、義妹に電話でつい強い口調で「貴方達夫婦が考えているような状況ではないので事故のないようとにかく急ぐよう。」、5時すぎになり義妹夫婦が到着し早速面会義妹夫婦も、事の重大さに唖然とし妻へ「どうして、どうして」の言葉しかなかった。その後、強い薬の投与により血圧の上りはないものの、容態も少々安定したが医師の方からは、いつ何時最悪の状況を招く恐れがあるので、いつでも連絡が取れる状況でいるよう、また、2･3日は別室の家族待合室で待機するように言われた。その夜は学園からお忙しい中、和子先生･前田常務以下多数の職員の方々のお見舞いをいただき、私どもにとっては精神状態不安定の中、大変心強く有難く感謝の気持ちを後日家族で話題にしたところです。

何とか薬の効果で取りあえず一命は取留める事ができたが、翌日、主治医の医師の病状説明の中で話されたのが、「たこつぼ型心筋症」というまれにみる症状で、主な原因は強度のストレスによって起こる病気である。悦郎の場合は、肉体的にも精神的にも衰弱しているので完治は望めないとのこと。医師から間接的にではあるが、延命治療をするかしないかの判断を打診された。ここ1･2年前から、悦郎の肉体的な衰えを私共も感じていたおり、ちょうど昨年の今頃、桜ヶ丘病院の先生より悦郎の脳は「委縮が激しく完治する見込みはまずないだろう」と言われ、脳の委縮がさらに進み動け無くなった時、他施設へ移るのかこのまま新樹学園で看取りまでお願いするのかを学園と話しあったらとアドバイスをいただいた。

早速、前田常務とお話をさせていただき、桜ヶ丘病院の先生のお話をした所、学園としても入所者の高齢化･保護者の高齢化等々を考慮すると、看取りを考えざるを得ないのかなとの話であった。その足で肝付町の吉川病院を尋ね、前述のような話を院長先生にし、悦郎の症状が悪化した時、学園での看取りをしていただくのかを確認しに行った。先生は快い返事を下さった。このようなことを踏まえ私たち夫婦は、義妹夫婦を交え以前よりこの話題を真剣に議論し議論の結果、学園にまた皆様にご迷惑になる様な行動は慎しみ、治ることのない延命治療は一切行わない覚悟を確認していたので、医師から打診のあった時はハッキリと「今現在行っている治療を続けてほしい」旨の相談をした。（後述しますが、結果的には現在の治療が延命治療につながり悦郎を苦しめたのかもとの思いもある?）

96歳になる高齢の母への対応がまた苦脳の種で、妻･義妹達は母の体調を考慮し、もしもの時話せばとのことであったが、悦郎はICU室に運ばれていらい、植物人間同様一回も声を発する事もなく、たまに白目を開ける程度で、何の反応も示さずの状態である。妻と義妹は様々な事を考慮し母の面会に消極的であったが、ICU室での治療3日目に私の強い説得で義妹夫婦が母を迎えに行くことになった。何の前触れもなかったのに母は、義妹夫婦と顔を合わせた途端「悦郎がやっせんかったのなぁー」と言ったという。義妹は、悦郎の現在置かれている現状を伝え病院へ向かった。病室につくと母は気丈にも涙も見せず、悦郎の手を握り締め体を撫でながら声を掛けた。途端に悦郎の目にうっすらと涙が滲み、また、顔に薄笑いを浮かべ、手をじっと握り返したと母は凄く嬉しそうに呟いた。入院以来、私達夫婦や義妹夫婦には見せなかった仕草であった。母はしばらく悦郎を見詰め、「もうよか。悦郎は産れた時に、病院の先生からダウン症の子供は20歳ごろまでの寿命だと聞かされていたので、60歳になるまで長生きをしてくれてありがとう。よく頑張ったね。」と言っているように見えた。母は2時間程病室にいて、「あとは　貴方たちにまかせる」と言って、悦郎に最後のお別れをするようにして病室を後にした。私はこの一連の流れを思いだす時、両親･姉妹の悦郎への誰にも負けない深い愛情と、家族の絆を感じない訳にはいかなかった。

悦郎の症状は一進一退を繰り返す中、妻は毎日病院へ泊まり込み、義妹は遠方より2･3日おきに病院へ顔を出す日々を過ごした。その間2･3回、医師から、「そう長くない時期に危機的状況が発生するか分からないので、必ず連絡を取れるように。」との話。その間にも学園の職員や学園を退職された方々のお見舞いを多数いただき、私共は非常に心強く有難かった。

5月に入る頃から、発作なのか痙攣なのかたまに苦しそうな表情を見せるようになり、私達も今の治療が延命治療に当たるのではと思いつつ、まだ希望を捨てる訳にはとの思いが強く働いた。その後5月8日頃から、発作も頻繁に表れ、苦痛の表情を浮かべる仕草さが見受けられる様になってきた。妻も看病疲れやら色々とストレスが溜まり、徐々に口数も少なくなっていた。だんだんと、ベッドが揺れるくらいの痙攣が頻繁に表れるのを目の当たりにした時、私達家族に疑心暗鬼の心が芽生えつつあった。今の治療は家族で何回も確認し合った延命治療ではないのか?良くなる治療なら、いくら犠牲を払ってでも最前の努力は惜しまない覚悟は出来ていたが、しかし、この年齢まで頑張ってきた悦郎を苦しめる延命治療だけは避けたいとの気持ちが強く、ついに5月10日、私達夫婦･義妹夫婦で最後の苦渋の決断を下した。それは母の言葉にもあったように、両親の高齢化と共に、長年母親役を務めてきた妻の決断「悦郎は今日まで一生懸命頑張ってくれた、もう苦しむ姿を見るのが辛い。もうよか。」の一言であった。この言葉を発した時の妻の表情は、顔は強張り真青で、体は硬直し立っているのがやっとという状態。私達男性2人は、ただただ溢れる涙で優しく言葉をかけることも出来なかった。この苦渋の決断を、医師に伝える役目を私が担うことになった。その夜、主任看護師に話にいった所、今日は早番の為帰られた後で他の看護師に伝言し、明朝、お話をさせて頂くことになった。5月11日8時頃、主任看護師に病室に家族全員呼ばれた。主任看護師は私達の気持ちを察して、面会時間以外なのに静かに悦郎と過ごす時間を取って下さった。冒頭に述べたように刻々と迫りくるその時、意を決して私は主任看護師へ、「悦郎を静かに苦しむことなく眠らせてほしい。」と伝えた。主任看護師は優しく、静かにお辞儀し病室を出ていかれ、間もなく病室を訪れ主治医と家族の了承を得たので、酸素吸入器や様々の点滴器具を外しにかかられた。私達4人は、天国にいる父へ「悦郎がもうすぐお父さんのもとへ行きます。悦郎を宜しくおねがいします。」と言って静かに合掌するしかなかった。

悦郎は、平成27年5月11日午前10時40分、享年60歳の人生に幕を閉じた。

かねてから、話し合いの通り悦郎にもしものことがあったら、悦郎の60年の人生の中で約27年間、自分の家族同様親身になってお世話いただいた「天上会･新樹学園」へ、最後のお別れを霊柩車の中からできればと思い、病院を出る寸前、学園へ電話し了承をいただき早速学園へ向かった。私達は、霊柩車の中からお世話になった学園･職員･利用者の皆様にお別れができればということで学園へ立寄ったのですが、学園の計らいで学園内に霊柩車を入れて頂き、また、悦郎の亡骸も教室のホールへ下ろして頂き、利用者の殆どの方が小さな花束を捧げてくれ、また悦郎の名前を呼びながらすすり泣く姿を見て妻は感激のあまり利用者の皆さんとともに涙、涙の連続。学園に最後の別れを告げ実家へ。

5月12日通夜、5月13日葬式。妻は、悦郎は実家に中学校1年生までしか生活せず、地元･部落の人は悦郎を知ってる人は殆どいないから、皆さんに迷惑をかけるといけないから、家族葬で葬式は行いたいと言っていたが、従妹より「ヨウちゃん家族葬ほど寂しい葬式はないよ。後で後悔するよ」と言われ、「悦ちゃんの最後の儀式だから通常通りにやった方がいいよと、また、地元には悦ちゃんのことを知っている人も沢山いるよ」とアドバイスを受けた。通夜･葬儀に、学園の職員･利用者の皆さん･地域の人々･学園を退職された方々等々、私達

の想像を遥かに超える参列者にただ驚くばかりであった。（従妹のアドバイスを受けて正解だった悦郎の為にも後々後悔せずによかった。）悦郎は日頃から踊りが大好きで、音楽が鳴ればどんな曲にでも合わせて踊る特技の持主でもあった。通夜の席上で、悦郎の大好きだった美空ひばりや細川たかしの曲を流して頂き、悦郎の在りし日の姿（天上会の夏祭り・高山ドームでのゆかた会の踊りの発表会で、あの大舞台で観客も超満員の中、前田常務や私達家族がハラハラする中、悦郎は堂々と単独で舞台を務めた姿等々）が、目に浮かび新たな涙を誘った。また、葬儀屋さんの計らいで、学園で利用者の方々からいただいた小さな花束をアレンジし大きな花鉢に活けた祭壇に、私にはどの生花や飾り物よりも生き生きとして輝いて見えた。悦郎の最後のお別れの時、利用者の皆さんがその花束を手に取り棺の中に。悦郎にとって最高の贈り物に。葬式も滞りなく終わり、出棺のおり私は悦郎の大好きな曲「矢切の渡し」で見送っていただくよう葬儀屋にお願いし、「矢切の渡し」が流れるなか静かに霊柩車は火葬場へと。

私達は日頃より不謹慎な言葉ではあるが、悦郎が私達より1日でも1分1秒でも早く逝ってくれたらこんな幸せはない。また、亡き父より生前「悦郎をたのんじね」と言われたことに、現在、妻も気持ちの整理もつき、私達夫婦も責任を果たせたことに日々充実感を味わっている。

最後に保護者会の皆様方には、このような形でお別れすることになりましたが、何のご協力も出来ず恐縮しております。今後とも、何かの機会があればお声をかけて頂ければ幸いです。天上会の益々のご繁栄と皆様方のご多幸を祈念致します。

悦郎の人生は60歳で幕を閉じたが、悦郎に取っては満足行く素晴らしい人生を送れたと家族一同信じ大満足。

これも悦郎が最も大好きで最も愛した、天上会・新樹学園の皆様方、利用者そして様々な皆様方のお蔭と感謝・感謝・感謝。

新樹学園 職員からの追悼文

「大切な仲間との別れ」

施設長 倉 千砂子

「おはよう。」の声の掛け合いで一日が始まり、「おやすみ。また明日ね。」と布団を掛けながらその日が終わる。何でもないような一場面だが、こんな毎日がずっと続いて欲しいと思う。

5月11日、大切な仲間だった悦郎さんとのお別れがあった。ご家族の計らいで、病院から自宅へ帰る途中学園に立ち寄って下さった。利用者一人ひとりが、花を手向けてお別れをすることが出来たが、元気に帰ってきてくれると思っていた皆や職員にとって、とても辛い結果だった。涙する人、呼びかける人、じっと見つめている人。それぞれがいろんな形で悲しみを受け止めていた。悦郎さんからは、怒った顔、悲しそうな顔、最高の笑顔と一緒に沢山の思い出をもらった。「貴方はずっと皆の中にいるよ。」と呟いているのは私だけではないと思う。「悦郎さんありがとう。」

「一期一会」

主任 田場 真一郎

私が悦郎さんに出会ったのは、入職した5年前です。踊りが大好きで、活動もお洗濯も一生懸命な悦郎さん。頑張り過ぎて時々関節を患っては、二人で病院に行った時の事を思い出します。いつも元気な悦郎さんが体調を崩し始めたのは、四年ほど前、糖尿病の診断を受けた頃からでした。認知面で変化が見られ始めたのもその頃からでした。だんだんと食べづらく、思いを伝えづらく、歩きづらくなっていく悦郎さんに、少しでも悦郎さんらしく過ごせるように、少しでも悦郎さんの思いに添えるように、悦郎さんが苦しまないようにと、日々みんなで関わらせてもらいました。この悦郎さんとの一生に一度の貴重な出会いを胸に、これからも悔いの残る事のないよう、新樹学園で生活している皆様を支えていきたいと思います。悦郎さんありがとう。

「共に過ごした日々」

支援員 山元 学

悦郎さんと出会った平成22年当時は『踊りと洗濯の好きな小柄な方』という印象だった。平成23年頃から「物忘れが出てきたね」という声が職員から上がり始め、目に見えて機能が低下していった。平成26年に担当になるが、その頃は脳萎縮の進行により、日常的に歩行、摂食、会話等が困難になってきた。平成27年4月18日、微熱があったものの、普段と変わりなく見えた。翌日熱が上がり受診すると、軽い肺炎という診断、20日に入院となった時も熱が下がれば帰れると思っていた。21日、発作が始まったと連絡を受け、行くと苦しそうな姿があった。23日には容態が悪化しICUへ。それでも病棟に戻れるものと思っていた。

今でもあの時の顔が目に浮かび、もう少し出来ることがあったのではと思う日々が続く。学園での生活は楽しかったと悦郎さんが思って下さっていれば、せめてもの救いだ。

保護者様の声

パーソナルサポートセンター ぽこ・あ・ぽこ

私の息子は現在7歳、自閉症です。

支援を受ける3年前の状態は、自分と両親だけの空間で生活しており、お友達や祖母たちが家に来ても、「帰って」と言って、家に入ることを拒絶していました。

息子の今後の成長を不安に思い、市役所に相談したところ、『ぽこ・あ・ぽこ』を紹介され、支援を受けることにしました。

支援を開始した当初は、支援員を受け入れず、支援を開始するのに30分から1時間程度掛っていました。その後、支援員の方々の絶え間ない努力の結果、支援開始から半年後には、支援員との関係を築くことで、スムーズに受け入れられるようになりました。今では、お友達や祖母たちが来ると「おうちに入って」と言うまでに成長したことは、とても嬉しく感謝の気持ちでいっぱいです。

現在は、行動援護と身体介護の支援を週2回、学校から帰宅後に受けています。

行動援護では、自宅周辺を散歩しながら、車や水路等の危険性や自然の中での共感関係などを楽しみながら学んでいます。散歩に行くと、必ず草花や石などを『お母さんに持って帰る』と言って、お土産を持って帰って来ます。私も息子からのお土産を楽しみに待つようになりました。

身体介護では、主に入浴介助、衣類の着脱、食事介助を受けています。雨の日は散歩に行けないので、家の中で生活に必要な知識を学んでいます。

この支援を受け、息子の成長はもちろんですが、私も成長したと思います。

それは人に頼るという事です。支援を受ける前は、息子と2人だけの生活で、「私が頑張らないと」という気持ちが強かったと思います。支援を受け始めた頃に、支援員さんから『お母さん、大丈夫だから。支援を受けている時は、私たちに任せて。久しぶりにゆっくりお風呂に入ってきてください。』という言葉を掛けられました。私は久しぶりに1人でお風呂に入りながら、「1人で頑張らなくてもいいんだ」と思い、心のゆとりができ安堵感から自然と涙がこぼれました。

子育ての悩みや葛藤は1人で抱え込んでしまいやすく、特に自閉症など障がいを持つ子どもの親はその傾向が強いと思います。その中で、『ぽこ・あ・ぽこ』からの行動援護などの支援を受けたことで、息子の成長の手助けと親の気持ちを救っていただいたことに感謝し、これからも共に歩んでいきたいと思います

平成26年度 苦情・相談受付内容の一部

■照葉の森

申出人	苦情相談内容	対応状況
入居者	A世話人の態度が変わった。昔いた世話人と一緒だ。 支援員が事務所にいる時と、いない時の態度が違う。 数名の職員に相談しているが… また、他の利用者に対する叱責がすごくて可哀そうとの事。	申出人とA世話人と受付担当者で話をする。 申出人の勘違いもあり納得される。 利用者への叱責については、権利擁護等の定期的な勉強会の実施。

■カイロス

申出人	苦情相談内容	対応状況
保護者	個別支援計画の件で、就職についての不安を相談される。	利用者の現状をお話し、今後も事業所としても就職に向けて支援を行なっていく事を説明させて頂いた。

御礼

ご寄付有難うございました。皆様から頂いたご厚志は、大切に使わせて頂きます。

今泉 正臣様 ／ 河合 民子様 ／ 堀田 かをる様 ／ 折尾 勝子様 ／ 前田 貞子様 ／ 上鶴 奈穂子様
樗木 千鶴子様 ／ 大山 清勝様 ／ 星塚敬愛園自治会様 ／ 鹿屋市漁協様（順不同）